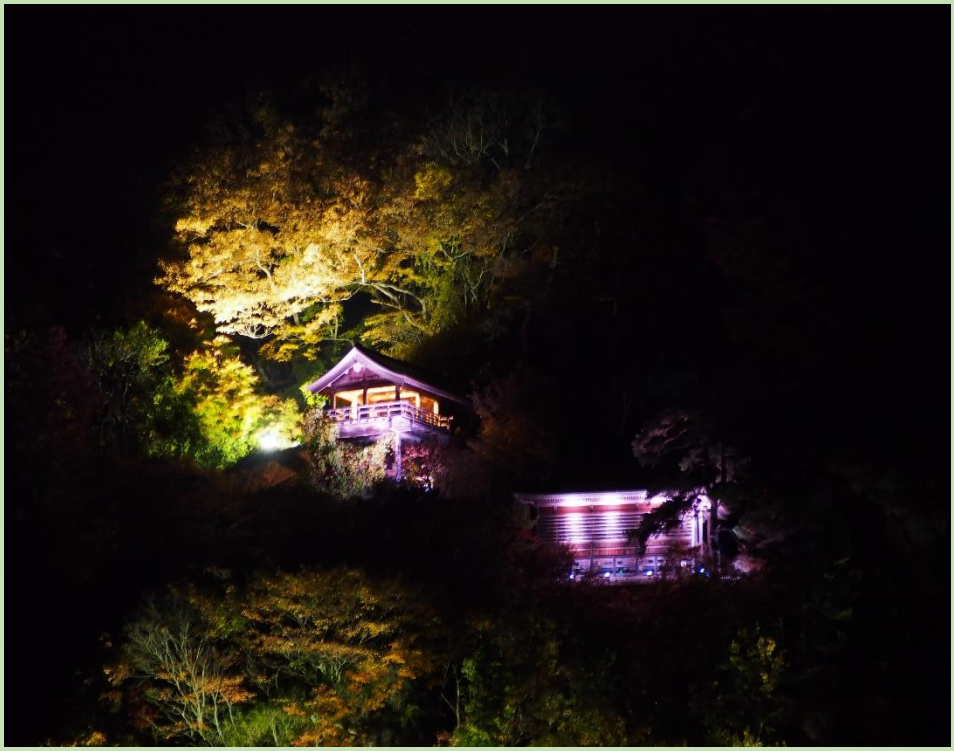
山寺芭蕉記念館だより



ライトアップされた山寺

○事業報告　特別展「芭蕉展　―漂泊の俳人、その旅と文学―」

○「第 11 回山寺芭蕉記念館英語俳句大会」実施報告

○収蔵品紹介　三行書　木庵性㤗

No.31

2020 年３月発行

山形市制施行 130 周年記念・山寺芭蕉記念館開館 30 年記念

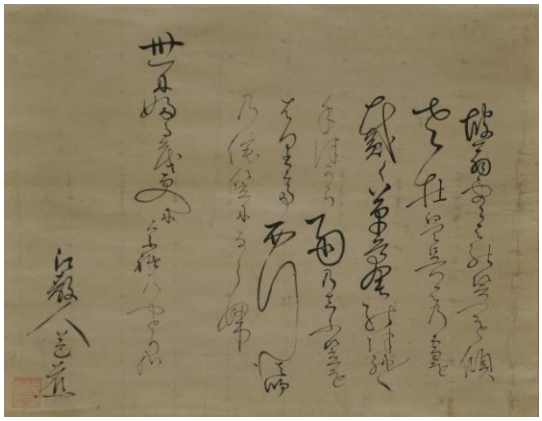
特別展　奥の細道 330 年記念　芭蕉展 ― 漂泊の俳人、その旅と文学 ―

俳人・松尾芭蕉は、江戸時代前期に洒落・滑稽を旨とする言葉遊びの文芸だった俳諧を、芸術として確立させました。その業績には、芭蕉の旅が大きな影響を与えたと考えられています。とりわけ「おくのほそ道」の旅は、芭蕉の世界観に大きな影響を与え、その俳諧の大きな転換点となりました。

本展は令和元年６月７日から７月 23 日まで開催され、芭蕉が「おくのほそ道」行脚で山寺を訪れてから 330 年になることを記念し、「おくのほそ道」、特に山形の旅路に焦点をあて、芭蕉に関する貴重な資料や関連資料によって、芭蕉を魅了した山形路を追体験できる展示としました。

前赤壁図

1　深川隠棲から元禄元年の旅まで

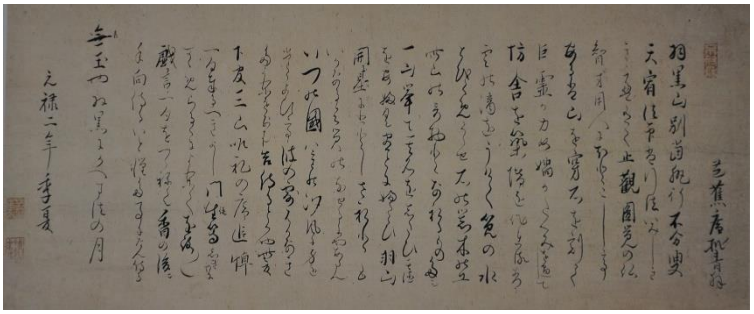


市文　《「世にふるも」句文懐紙》松尾芭蕉 筆
江戸時代　本館蔵

芭蕉は十代の末から仕えていた伊賀上野の藤堂藩の家臣・藤堂新七郎家に仕え、その嫡子の良忠と共に俳諧に親しみます。しかし、芭蕉が 23 歳の時に良忠は病没した事で、芭蕉は職を辞し、俳諧師を志して 29～32 歳までの間に江戸に出て俳諧宗匠として成功します。そして、江戸俳壇に一門を確立後ほどなく深川に隠居します。芭蕉の深川の庵は芭蕉庵と呼ばれるようになります。芭蕉は、貞享元年（1689）の 41 歳の時から元禄元年までの５年間に紀行文で知られる４つの旅に出ます。『野ざらし紀行』『鹿島紀行（鹿島詣）』『笈の小文』『更科紀行』の旅です。

「世にふるも」句文懐紙は、前書きと発句に杜甫・蘇軾（蘇東坡）・西行・宗祇の名前が見られますが、いずれも旅の中で己の文学を昇華させた人物たちで、芭蕉が彼らの生き方に共感していた事を垣間見ることができます。

2「奥の細道」の旅



県文《天宥法印追悼句文懐紙》松尾芭蕉 筆
元禄2年(1689)　出羽三山歴史博物館蔵

元禄２年（1689）芭蕉は門人曾良と共に奥羽地方を目指して「奥の細道」の旅に出立します。古来よりの歌枕・名所・旧跡を訪ね、能因・西行などの詩歌の先人や義経・義仲など悲劇の英雄の跡を辿るこの旅を通して、芭蕉は「不易流行」の俳諧理念に到達し、俳諧に芸術的深化を

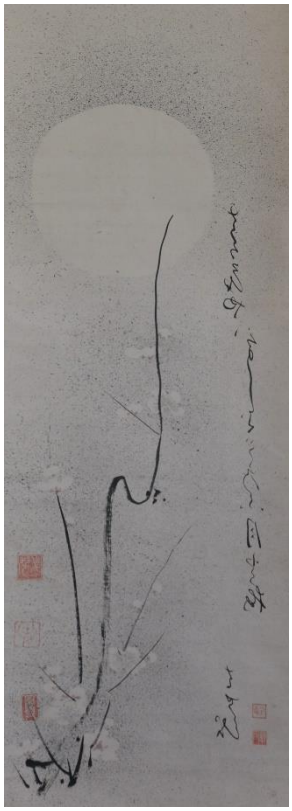
もたらしました。

「落ちくるや」句文懐紙は、『おくのほそ道』行脚で那須の庄屋高久角左衛門方に泊まった際にしたためたもので、「落くるやたかくの宿の郭公」の句を見ることができる。

天宥法印追悼句文懐紙は、羽黒山の中興の祖である天宥法印は庄内藩との諍いで流罪になりそのまま亡くなりましたが、その業績を讃え追悼する文と句が書かれているものです。

3　上方漂泊から晩年まで

「奥の細道」行脚の後、芭蕉は京都・近江などの門人たちの間を行き来しながら、俳諧の新たな境地を模索します。この時期、芭蕉は「軽み」という、芸術的身構えを捨てて平易な言葉での作句を追及しました。その間、元禄三年春より江山中の幻住庵に４カ月ほど滞在して「幻住庵記」を著しました。



市文《「はるもやゝ」発句画賛》
森川許六 画、松尾芭蕉 賛
江戸時代（17 世紀）　本館蔵

元禄４年（1691）の冬、芭蕉は江戸に帰ります。元禄七年四月には推敲を重ねてきた『おくのほそ道』の清書本が完成します。その翌月、芭蕉は江戸を発ち伊賀上野に帰郷しましたが、九月、大坂に旅立ちます。しかし、これが芭蕉最後の旅となりました。出立前から体調不良を感じていた芭蕉は大坂で病臥し、大坂に着いてから約１カ月後、多くの門人たちに看取られながら五十一歳の生涯を終えました。

「はるもやゝ」画賛は、芭蕉に句に合わせた門人森川許六の朧月の前の梅が描かれている俳画です。元禄６年（1693）正月、芭蕉が江戸の許六亭を訪れた際の作で、俳画の名品の一つです。

また、洒堂宛芭蕉書簡は、芭蕉が亡くなる前年のものです。門人の洒堂に宛てた手紙ですが、洒堂に「利口ぶる心があるのではないか」と指摘し、「言うことをきかないのであれば絶交する」と伝える、弟子への厳しい指導が見られる珍しい手紙です。

山寺芭蕉記念館開館 30 年記念

俳人　黛まどか氏講演会
「世界の中の俳句　― 芭蕉から現代まで ―」

令和元年７月 20 日、山寺芭蕉記念館開館 30 周年を記念した事業として、俳人黛まどか氏の講演会「世界の中の俳句　～芭蕉から現代まで～」が開催されました。黛氏は句集『京都の恋』で山本健吉文学賞を受賞されておられますが、スペインのサンティアゴ巡礼道や四国遍路を踏破されて、俳句を交えた紀行文など著書が多数あります。　今回のご講演では俳句の変遷をたどりながら、その魅力を探り、また、世界に影響を及ぼしている芭蕉の俳諧や「おくのほそ道」の魅力についてお話しいただきました。

企画展 山寺と紅花 Ⅵ ― 最上川舟運と酒田湊からの海運 ―

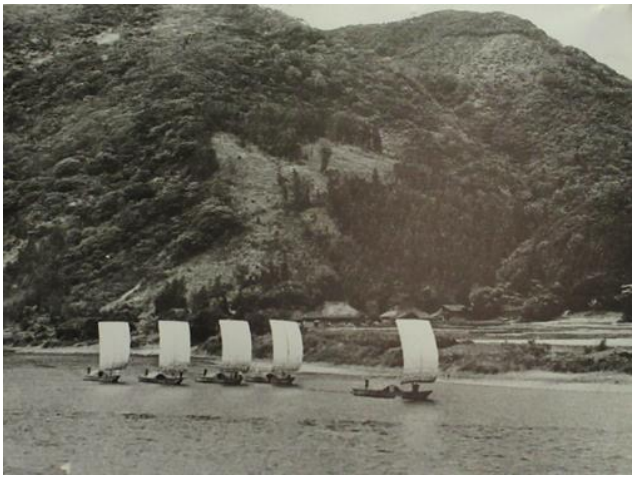
紅花交易は山形に大きな富をもたらしましたが、そこで利用された最上川舟運と北廻り航路による海運は、京都・大坂等の文化を最上川流域の寄港地にもたらした文化の道でもありました。この度の展示では、舟運・海運の実態や紅花産業に関する資料などを展示します。

本展は令和元年 12 月 7 日から令和２年２月 17 日まで開催され、紅花交易を担っていた最上川舟運や海運の歴史と文化を見つめ直す機会としました。

1 最上川舟運

最上川は、山形県・福島県の県境の吾妻山に源を発し、山形県内を北流して酒田市で日本海に注ぐ、延長約 216 キロの川です。富士川・球磨川と共に日本三急流の一つです。

最上川を利用した運搬は古代からありましたが、最上川舟運が大規模に行われるようになったのは江戸時代に入ってからです。江戸時代初期からの村山地方の領主米（年貢米）の江戸・大坂廻米に伴う最上川舟運は寛文 11 年（1671）に西廻り航路が開発されたことにより、急速な発展をみました。



《最上川を上る小鵜飼い船》　明治期
中山町立歴史民俗資料館蔵

「最上川を上る小鵜飼船」などの写真は明治時代の帆船による舟運の様子を今に伝えてくれます。

2 日本海舟運

寛文十一年（一六七一）商人の河村瑞賢は、幕府の命により、日本海の港、出羽国（現、山形県）酒田から北陸沖・山陰沖・瀬戸内海・大坂を経て江戸に至る西廻り航路を整備しました。

紀豊古筆の「出羽一宮鳥海山坂田浦眺望図」には繁栄した頃の酒田湊の様子を窺うことができます。また、船絵馬からは危険を伴う船旅への安全を願い人々の祈りを見ることができます。船箪笥は水に浮くように作られていて、万が一の水難への備えがなされていたことがわかります。

《船箪笥》江戸時代　山形大学附属博物館蔵

3 最上川と文学

最上川は、古くは平安時代前期の『古今和歌集』の和歌の中で歌枕としても知られています。それらの古歌では、最上川を実際に見たのではなく、遠い出羽国に思いを馳せて詠んだものでした。江戸時代に入り松尾芭蕉は、江戸より北の各地の歌枕を実際に訪れる事も「奥の細道」の目的として出立しました。そして、その旅を元に紀行文『おくのほそ道』が書かれました。そこには、最上川碁点峡谷の碁点・隼などが「恐ろしき難所」と紹介されています。芭蕉は最上川は本合海（現、新庄市）から清川（現、庄内町）まで舟下りで移動しました。芭蕉の句「五月雨をあつめて早し最上川」は『おくのほそ道』中の名句の一つです。

市文《『おくのほそ道』》内藤丈草 筆
元禄 10 年(17 世紀)　本館蔵

4 紅花の生産と流通

県文《紅花屏風》(右隻)青山永耕 筆
江戸時代(19 世紀)
㊟長谷川コレクション・本館蔵

最上紅花が記録に初見されるのは安土桃山～江戸時代（天正～慶長年間）でしたが、元禄時代には特産物としての評価が定まっていました。

紅花は６月頃に開花し、花摘み・花洗い・花寝せ・乾燥という過程で干花である紅餅（花餅）になって流通しました。紅花の需要地はほとんどが京都であったため、大部分の輸送ルートは最上川を下り、酒田から日本海を舟運で西廻り航路によって敦賀、大坂、江戸へと回りました。敦賀で荷揚げされた積荷は馬と琵琶湖の舟で京都まで運ばれました。

それらの生産・流通の様子は絵師の青山永耕によって「紅花屏風」に生き生きと描かれています。

「第 11 回山寺芭蕉記念館英語俳句大会」実施報告

同大会実行委員長　大場　登

「山寺から世界へ」との意気込みで、2009 年に始まった本大会も、今回で開催１１回となり、改めてこれまでご支援をただきました皆様方に感謝を申し上げます。

さて、前回の第１０回大会から、第１部（a）日本人大人、（b）外国人大人、第２部高校生、第３部中学生と改め、４月上旬から６月上旬の２か月間募集。参加者総数８３０名、１２７７句の投句があり、これは前回を若干下回りましたが、入選者３６７名、４９１句となり、その分では前回の１．０４倍、１．２３倍の

増となり、より多くの作品を『入選作品集』に掲載できました。外国人大人の部には合計３０か国（前回と同数）から１２０名、２３０句の応募があり、同俳句大会の国際的な認知度の高まりを感じております。

審査は１次・２次と、２回実施し、飯島武久審査委員長他５名のベテランが当たりました。審査講評の主なものは、「俳句は簡潔な表現で多様なアナロジー（類推）やイメージを喚起するところが魅力。英語俳句は、日本の五七五より少ない音節で内容を多く盛り込むことができ、花鳥風月の抒情詩から一歩踏み出て、物語性を盛り込める世界最短の詩形。その利便性を生かさない手はない」などでした。芭蕉がきっかけになり、英語俳句の愛好者が益々増加することを望んでおります。

以下は、各部最優秀作品です。ご堪能下さい。

第１部（a）：日本人（一般）

・岸本　瞳（きしもとひとみ）　(宝塚市)

White chrysanthemum--　　白菊や母なき「母の日」を飾り
Decorates　　（作者訳）
Mother's　Day

第１部(b):一般（外国人）

・Chen-ou Liu (Canada)（カナダ）

eightieth birthday　　八十路母の髪梳きやれば冬の月
I comb winter moonlight　　（飯島 武久訳）
into mother's　hair

第２部: 高校生

・金子　明日香（かねこあすか）（山形県立山形西高等学校三年）

A white vapor trail
a way into the future　　夏空に未来への道飛行機雲
the cloudless blue sky　　（作者訳）

第３部（中学生）

・Mitra Paźanin (Croatia)（クロアチア）

dusty puddles　　くすんだ櫂語る漁師の物語
on the wall of restaurant--　　（萬里小路譲訳）
the fisherman's tail

芭蕉「奥の細道」尾花沢での交流 ― 紅花と鈴木清風―

松尾芭蕉は「奥の細道」行脚の中、出羽国（現、山形県）尾花沢を訪れて商人の鈴木清風を訪ねている。鈴木清風は嶋田屋鈴木家の第三代八右衛門で慶安四年（1651）生まれ。清風は長じて家業の物品買継・金融業の仕事で、荷受問屋との交渉のため各地に長期滞在したが、その中で俳諧を学び多くの俳人と交流を重ねた。

そうした商用を兼ねた遠出のついでだったかと考えられるが、清風は江戸で芭蕉と俳諧の席を二度共にしている。一度目は貞享 2 年（1685）６月２日の江戸小石川での百韻俳諧興行の時、二度目はその翌年３月 20 日に七吟歌仙を巻いた時である。いずれも其角・嵐雪など蕉門の重鎮も同席している席であった。

その芭蕉と清風の交流があったからこその、芭蕉の尾花沢滞在であったと言えよう。「奥の細道」での芭蕉の同行者は、当初路通が考えられていたが、最終的には変更されて曽良が同行することになったが、貞享３年の俳席で清風と曽良が同席していたことも、旅の随行者に選ばれるにあたっての有利な一要素であったであろう。

清風は、尾花沢を訪れた芭蕉と曽良を温かく迎え、いろいろ便宜を図っている。芭蕉は『おくのほそ道』の中で清風の事を「富める者なれども志卑しからず」と褒め称えている。その清風のもてなしに対する返礼句として詠まれたのが、「涼しさをわが宿にしてねまるなり」で、「くつろぐ」の尾花沢周辺の方言「ねまる」を用いて、清風の好意で安座できることに感謝の意を表している。

芭蕉の紀行文『おくのほそ道』のみでは伺い知れぬのだが、曽良の「随行日記」を見ると、芭蕉は尾花沢での 10 泊のうち清風宅には３泊しかしていない。他は近所の養泉寺を紹介したのだ。この清風の対応について、国文学者の故尾形仂は「通り一遍の儀礼だけを立てた、いかにも金持ちらしい冷淡なあしらいと解する説があるのは間違っている。もし、そうであったなら、芭蕉のこの句文は成らなかったであろう。（中略）芭蕉の養泉寺宿泊も、芭蕉の起居の自由と休息をおもんばかっての、清風のこまやかな心づかいによるものであったにちがいない。」（注１）と評している。

それを裏付けるのが清風の子孫である鈴木正一郎氏による、清風に関する次の情報である。「家庭生活に於いて、清風は決して恵まれたものではなかった。生涯に娶った妻は四人、いずれも死別である。最初の妻は清風 38 歳時に死去、芭蕉来訪時に清風は独身中であった」（注２）と。

清風は、商家の商売上崩せない慌ただしい生活のリズムに芭蕉を１週間以上を巻き込むのは忍びないと考えたのではないか。ましてや、その時には妻は死去していて、業務で不在中の清風の代わりに芭蕉に気遣のある世話をしてくれる者もいない。それならば、信頼していたであろう養泉寺の住職に芭蕉を託そうと考えたのではないだろうか。しかも、養泉寺は前の年に新築されたばかりで、そ

こでならば居心地が良好の環境で過ごすことができるだろうとの判断もあったであろう。

鈴木家は金銀貸付と物資取引などの経済活動で財をなしていた。その対象には紅花が含まれていたのかどうかは直接取引を示す資料はないが、「紅花大尽」との異名をとっていた事から紅花の取り扱いはその商売の中でも象徴的で、大口の紅花取引に係わる商売もしていたと考えられている。芭蕉と尾花沢を結び付けた紅花大尽・清風。芭蕉は、立石寺への道中で詠んだ紅花の句を尾花沢の条に入れている。「まゆはきを俤にして紅粉の花」と。

注１　『おくのほそ道評釈』尾形 仂　平成 13 年　角川書店

注２　『鈴木清風と尾花沢　―芭蕉の残光―』鈴木正一郎　2007 年　鈴木正一郎

（本館学芸員・相原一士）

やまでら歴史民俗散歩　27

山寺の高橋　― 架橋の推移 ―

山寺の門前町の間を流れる立谷川、ここに山寺宝珠橋が架けられている。山寺宝珠橋はかつて高橋という名称で知られ、架橋の場所にも変遷があった。

高橋は元々、立谷川の上流で紅葉川の合流地点の田楽淵すぐ下流に架けられていたとの口伝が残っている。その後、その橋は橋脚の都合で対面石のすぐ下流、神供岩の脇、下流に移された。その時の橋の位置が見られるのが製作年未詳の「羽州山寺宝珠山立石寺絵図」（図１）である。しかし、この橋も橋脚に問題があり対面石の東、上流に移された。その間の正確な年代は伝わっていないが、文久元年（1861）の「羽州山寺立石寺宝珠山略絵図」（図２）に対面石の上流の高橋が見られ、その年には既に移っていた事がわかる。その後、県が県道として整備する際にその高橋の西隣に架けられたのが現在の山寺宝珠橋である。

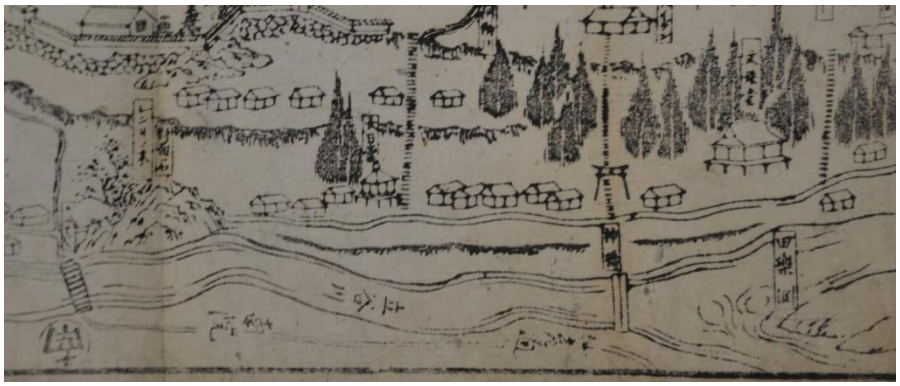


図１「羽州山寺宝珠山立石寺絵図」（部分図）

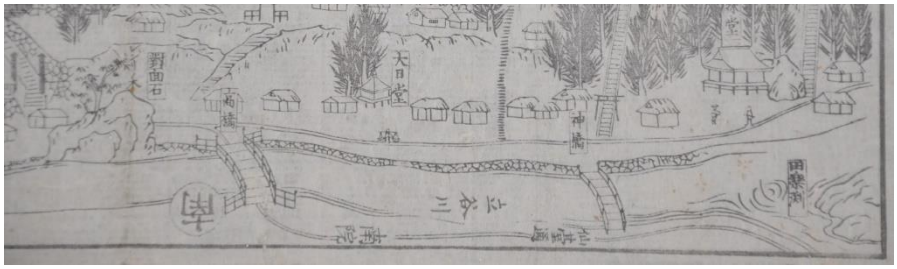


図２「羽州山寺立石寺宝珠山略絵図」（部分図）

また、高橋が田楽淵から離れた下流に架けられたため、神事上の必要から田楽淵の傍に山王橋（神橋とも）が架けられた。

それは「羽州山

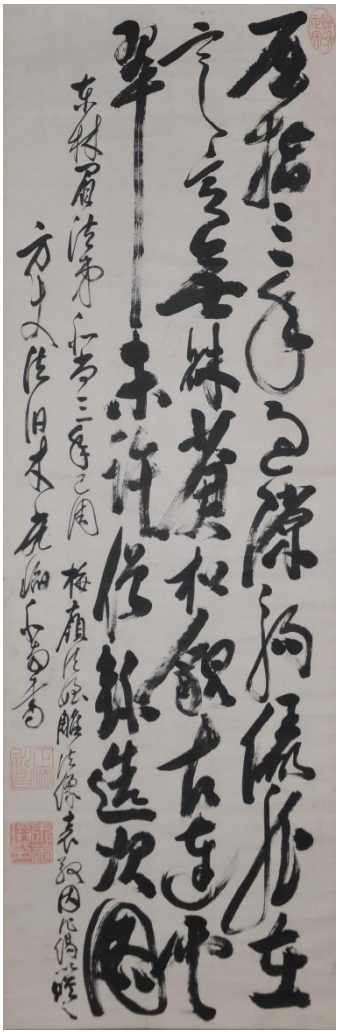
寺宝珠山立石寺絵図」（図１）を見ると一時は板２枚を並べたような簡素な作りの時代もあったようだが、「羽州山寺立石寺宝珠山略絵図」（図２）を見ると文久元年には橋らしい体裁の作りになった様ではあるが、明治 35 年（1902）田楽淵の堤防が破れ、翌年積み直すもすぐに流されたとの事で（注１）その時に流されたまま再度架けられる事無く今に至っている。

〔参考文献〕（注１）『山寺百話』伊澤不忍 著・伊澤貞一 編　1991

（本館学芸員・相原一士）

収蔵品紹介 31

三行書　― 黄檗三筆の木庵性瑫、迫力の筆勢 ―



《三行書》
木庵性瑫 筆
江戸時代（17 世紀）
㊗長谷川コレクション・本館蔵

〔解読〕
屈指三年過隙駒、儼然在
定意無殊、蒼松貌古連雲
翠、未許僧録造次図
　東林眉法弟和尚三年已周　梅嶺法姪雕法像表敬因心偈以贈之
　　方丈法旧木庵瑫和南書 印 印

江戸時代中期の僧侶・木庵性瑫の詩の三行書。木庵は明の黄檗宗の僧。万暦 39 年（1611）福建省泉州府普江県に生れる。19 歳で得度し、隠元隆琦に参じて教えを継ぐ。明暦元年（1655）に来日し、長崎に入った。その後、先に来日していた隠元の万福寺造営を助け、寛文４年（1664）に万福寺二世となって 17 年間在任した。寛文５年に江戸に出て将軍徳川家綱に謁し、寛文 11 年（1671）白金（しろがね）の瑞聖（ずいしょう）寺の開山となる。延宝 8 年（1680）紫雲居に退隠する。諡号は慧明国師。黄檗宗の宗風を称賛して、黄檗の白眉と称される。また、即非如一、隠元隆琦と共に黄檗三筆に数えられる。貞享元年（1684）没。

詩は「指折り数えると月日の経つのは馬が戸の隙間を走り去るように早く、三年は忽ちに過ぎた。思えば一瞬に過ぎない。これは身を正して禅定に入っているのとその実質は同じこと。共に短いが、心の充実面からみればいずれもほんの短い修行の経験だ。お前の周囲を見てごらんなさい。蒼い松が顔つきを古めかしく、雲に連なって立派な翠を静かに湛えている。そうした先達に比すると、おまえはまだ未熟だ。だからお前にとって三年は長く苦しい時間であったが、まだとり急いで僧録の図を取り扱うことを許すわけには参らぬ。もう一息頑張って更に修行を積んで欲しい。」との意。

山寺芭蕉記念館だより №31

令和２年３月 30 日発行

編集・発行　公益財団法人山形市文化振興事業団
山形市大字山寺字南院 4223
電話 023-695-2221　FAX 023-695-2552
ホームページ　http://yamadera-basho.jp
携帯サイト　http://yamadera-basho.jp/m/